

ナツノヨノRe…コード

How shall we find the concord of this discord?

(この不調和の中に、どういう調和があるというのだ)

——W・シェイクスピア『夏の夜の夢』第五幕 第一場

(一)

鈍い地響きと共に、視界全体が不意に暗転した。

一瞬、思考がフリーズする。

うわ、停電か、と脳が認識した次の一秒にはもう非常灯がパッと点いて、コントロー

ルルーム全体を赤い光で照らし出す。目の前の大型ディスプレイは停電なんてどこ吹く風で、こうこう皓々と光り続けている。浮遊しかけた意識をそちらに戻し、目の焦点を合わせる。

うん、大丈夫だ。作業内容は消えていない。

直前まで僕が集中して打ち込んでいたプログラムコードは、変わらずそこに在る。書きかけの変数名の先端で、カーソルが点滅している。

その行だけは最後まで書き上げて、手癖でセーブしてから、眼鏡を外してかたわらに置く。一気に世界が低画質になり、緊張がほどける。目頭を指で軽く押さえ、ふう、と大きく息を吐く。

この端末は、量子記憶装置アラの保守用コンソールのひとつだ。

二〇二〇年にサーブिसインしてから早七年、僕が参画するクロニクル京都事業の提供する様々な情報サービスは、もはや京都市民にとって不可欠なインフラとなっている。京都市はいまや、神奈川県出身の僕が若干引くくらい先の先進的情報特区だ。その中核であるこのアルタラセンターにも、自家発電装置とUPSはもちろん備えられている。アルタラ本体と主要な保守用機材は、外部電力供給が絶たれても七十二時間は単独で稼働できる。

だから、慌てる必要はない。

とはいえ、こりゃ面倒なことになったな、と気が滅入る。よりによって僕がシフトの日に、停電が起ころとは。

アルタラの保守運用も僕らセンター職員の大事な職務だ。三交代制のシフトが月に一、二回程度回ってくる。といっても、稼働七年目となつてはすっかり惰性のルーチンワークだ。平常時であれば、基本的には異常の有無を見守り続けるだけで充分だし、多少のエラーがあつてもマニュアルに沿つて対処すれば済む。

ただ、こういう大きめのインシデントが起けると、やることが一気に増える。ババを引いた、というやつだ。

しかも。

今日に限ってはそれだけでは済まない。悪条件が、なんと三つも重なっている。ババのトリプルコンボだ。

ひとつ。土曜日であること。

ふたつ。夜の十一時過ぎであること。

みつ。宇治川^{うじがわ}花火大会の開催日であること。

他の職員達は夕方から連れ立って京都府下最大規模の花火大会に出払ってしまった。つまり、増援はほぼ期待できない。花火自体はとくに終わっているだろうが、せんこ千古先生も徐先輩シューも同僚達も、すっかりいい気分で酔っ払っている頃合いだろう。呼び出すのも気が引ける。

まったく、誰だよ、こんな日にシフト入れたの。

——僕だ、とすかさずセルフツツコミを入れてしまう。

誰もが当番を避けたがるこの日にわざわざシフトを買って出たのは、他ならぬこの僕自身なのだ。

だって、宇治川花火大会なんて。

ずっと記憶の底に押し込めてきた、人生の黒歴史なのだから。

二〇二四年、三年前の宇治川花火大会。そこから逃げ続けた結果が、このザマだ。

「ああ、くそ。最悪だ」

思わず口をついて出る。



「あのさ、ちょっと変な話するね。……私さ、来週、実家戻ることになっちゃって」
一瞬、思考がフリーズした。

祭りの喧噪が、急に遠くなった。

えっ、と間拔けな声を発した僕の隣で、宇治川にたゆたう浮舟の灯りを眺めながら、彼女は続けた。「母親がちょっとね、倒れちゃってさ」

僕の顔をちらりと見た彼女は慌てて付け加える。

「あ、違うの、全然深刻なやつとかじゃないから！ そんな顔しないで。でもさ、お母さん、一人暮らしだから……。どうせ今の仕事も、フルリモートだし。京都にいらなくてもできちゃうしさ」

話が頭に入ってこない。こんなタイミングで、彼女の浴衣の柄とピアスがお揃いであることに気づく。何をやってるんだろう、僕は。

華奢な手が巾着バッグの紐を固く握り締めている。桜の花を象^{かたど}ったピンクの水引のストラップが、ふるふると小刻みに揺れている。確か、東寺^{とうじ}で買ったやつだ。

夜風が彼女の後れ毛を撫でた。火薬の匂いの奥に、かすかにいつものラベンダー系の香りがした。

「……だからさ、あのね、めちゃくちゃ急なんだけど、えっと」

彼女は少し言い淀んでから、僕の目をじっと見据えた。端正な顔立ちが、ほんのわずかに歪んだ。

続く言葉の予想はとっくについていた。やめてくれ。それ以上は言うな。心の中でそう叫ぶが、声には出せない。

「バンド、辞めることにしたんだ」

ごめんね、と言う彼女の小さな声に重なるように、ひゅう、と甲高い音が鋭く上空を切り裂いた。彼女の背後の夜空を、ひときわ長い光の尾がどこまでも昇っていく。束の間の静寂に続いて本日最大の尺玉が、鮮やかな大輪の花を天高く咲かせた。彼女の髪留めと白い首筋が照らし出された。わずかに遅れて重低音が大気を震わせ、僕の腹に鈍い衝撃を伝えた。

彼女が何を言っているのか理解できなかった。やつとのこととで絞り出した「そっか……」というひどすぎる返しは、スターマインの爆音にたちまち消された。源氏物語をイメージした雅な色彩が絶え間なく空を焦がし、無数の破裂音が山々に反響する。僕はただ茫然と、立ちすくむほかなかった。

二〇二四年七月六日、土曜日。

第四回 宇治川花火大会は、今まさにクライマックスを迎えようとしていた。

学生時代から惰性で続けていたコピーバンドに脱退者が出て、代わりにバンマスが連れてきたギターボーカルが、彼女だった。

帰りの方向が同じで、笑いのツボが同じで、映画の趣味が同じで、すごく感性が近いなと思える人だった。一方で僕とはまるで違ってひたむきで、我慢強くて、いつも自分より他人を優先してしまう人だった。

気にならなかったといえは嘘になる。だけど僕はそれ以上の行動に出なかった。色恋沙汰で崩壊したバンドの噂話は山ほど知っている。今のバンドがずっと続いてくれればそれで十分だった。そもそも、自分が彼女の隣に立つなんてあり得なかった。才色兼備で人望も厚い彼女にこんなヘタレ野郎が釣り合うわけがないし、利己的で卑劣な本性がバレて幻滅されるのだけは避けたかった。

一方で僕らのバンドには、初めてのオリジナル曲というささやかな夢があった。いつかやりたいねとは彼女とも言い合っていたが、キーボード担当で多少の心得のある僕は独断で作業を開始していた。夏の間に簡単なバンドスコアとデモ音源を作ってから、みんなに見せて練り上げていくつもりだった。

そこに僕はひそかに自分のエゴを詰め込んだ。

完全に彼女への“当て書き”だった。彼女の声質とテクニクを熟慮しつつ、彼女の奥ゆかしさと、内に秘めた芯の強さと、本番で見せる度胸を思い浮かべながら、夜な夜なD A Wと格闘した。彼女の好きそうなコードを打ち込み、リズムを刻み、フレーズを練った。聴かれてもバレないように細心の注意を払ってはいたが、僕にとっては、彼女のための曲だった。

スコアの推敲はタブレットより紙と鉛筆派なので、プリントアウトは常に持ち歩いていった。だからあの時も、リュックの中から出すことはできたはずだ。

作りかけではあっても、彼女に見せることはできたはずだ。

だが僕は、それをしなかった。

まだ完成してないし。Bメロも納得行っていないし。ていうか当て書きなんて言ったらドン引きされそうだし。

……いや、彼女がバンドを抜けてしまうのなら。

もうこの曲には存在意義がないわけだし。

急激に正気を取り戻した。すべてがものすごく恥ずかしくなった。

危なかった。僕は浮かれすぎていた。浴衣姿と祭りの熱気に、いい歳して舞い上がっていた。誘われたのが昨日って時点で気づくべきだった。急に実家帰りが決まって、最後に京都の夏らしい体験をしておきたくなっただろう。都合がつく暇人が僕だけだったってことじゃん。勘違いするな。そんなわけないんだよ。

何が当て書きだよ。恥を知れよ。

僕はひたすら混乱していた。混乱しながら、そんなことを考えた。

心にブレーキを掛けた。

そこから先の記憶は曖昧だ。どんな会話を交わしたのかまるで覚えていない。思い出せるのはただ、長い沈黙の果てに視線を逸らした彼女の横顔と、気まずさを振り払うような彼女のテンション、そして雑踏の中に消えていくターコイズブルーの背中に映える白い帯だけだ。それが、彼女を見た最後の記憶だった。

数日後、Wizのグループに短い挨拶を投稿したのを最後に、彼女は僕らの前から完全に姿を消した。あと一、二回は練習に出てくるだろうと思っていた僕は狼狽したが、後の祭りだった。彼女個人とのWizは未読スルーになって、さすがの僕もそれ以上の連絡は

自重した。彼女の脱退はバンドにとっても痛手で、代わりのメンバーも見つからず、程なくしてバンド自体が解散した。

僕も仕事が忙しくなり、バンドは過去の思い出となって、意識にも昇らなくなった。

季節は秋になっていた。地下鉄烏丸線からすまの改札を出た瞬間、ふわりとラベンダー系の香りがした。

唐突に、目尻から熱い何かが溢れて頬を伝い落ちるのを感じた。無意識にぼろぼろと泣いていることに気づいて、僕は一人うろたえた。

反射的に周囲を見回したが、彼女が好きだった化粧品ブランドの店舗がそこにあるだけだった。追い打ちを掛けるように、それまで考えもしなかった問いが僕の胸を締め付けた。

なぜ、あの時、譜面を彼女に渡さなかったんだろう。

あまりに遅すぎる後悔だった。

もちろん、あの場で彼女の決断を覆すことは不可能だった。観念して受け入れるほかなかった。バンドの解散も必然だった。たとえ譜面を見せたところで、僕らがそれを演奏す

る機会はついぞなかっただろう。

ただの自己満足なのはわかっている。恥ずかしさは今も変わらない。彼女だって譜面を渡されても困惑したに違いない。

それでも。

その譜面には、僕らの二年間がすべて詰まっていた。万の言葉を尽くしても足りない、彼女に対する思いが込められていた。

感謝と、敬意と、ただ幸せを願う気持ちと。

大切なバンド仲間だった彼女に、せめてそのくらいは最後に伝えておくべきだった。

あのバンドスコアは。

僕がああ状況で渡すことができた、唯一の餞別だった。それなのに。

彼女に餞別どころか、さよならすら僕はまともに言えなかった。

人生に“もし”はない。過去を書き換えることはできない。

たとえ人生を何周したって、きっと僕は同じ過ちを繰り返すのだろう。僕はその程度の

人間だ。あれから三年も経つが、何の成長もしていない。こうやって嫌なことに蓋をして、思い出さないようにして、一生、逃げ続けて生きていくのだろう。



何やってんだよ。たかがそんなことで。

シフト中だろ。

自己嫌悪を追い払うように首を振って眼鏡を掛ける。視界の情報量が一気に膨れ上がって、くだらない感傷を押し流す。明瞭になった意識で、今やるべきことを再認識する。

停電自体は、アルタラセンサーでは別に珍しいことではない。悪天候による瞬低は時々あるし、年に一度の法定設備点検時には自家発とUPSのお世話になる。だから、まあ、ひとまずはマニュアル通りの作業となる。

壁面の巨大スクリーンに視線を走らせ、表示を一つ一つチェックしていく。特に問題は

ケルビン

見当たらない。絶対零度もナノKのオーダーで維持されている。一箇所だけ、内部電源供給を示すINTERNALという赤表示が出ている。でも、それも想定内だ。

よし、アルタラには異状なし。

まずは一安心だ。当面は復電を待つことになる。停電発生からここまでは……およそ三分か。まだ復電しないということはそこそこ大規模な停電なのかもしれない。珍しいな。

さっきの休憩で外の空気を吸いに出たとき、遠雷が聞こえたのを思い出す。西の空に垂れ込めた雲の底がぴかり、ぴかりと光っていた。湿度が肌にまとわりつき、雨の前の特有の匂いが鼻について、これは降るな、と五感でわかった。こういうのを丹波太郎たんばたろうというのだと、京都こっけいに来て初めて知った。この手の京都豆知識を披露する彼女は決まってドヤ顔をしていた。なんだよ。自分も京都出身じゃないくせに。

——いや、そんなことはどうでもいいだろ。そう、雷だ。この停電もきつと落雷のせいだろう。市内の他の区域も停電しているのだろうか？ 雨の様子はどうか？

スマホを取り出し、天気アプリブルーラウエザーを立ち上げようとして、手が止まる。

“圏外”の文字が目に入る。

おいおい、携帯まで障害かよ？ 基地局にでも落雷したのだろうか。機内モードをオンオフしても状況は変わらない。停電プラス通信障害とは。……かなりひどいな。WiFiもPCの有線ネットワークも死んでいる。どこかの部屋のルーターが落ちてるんだろう。なんでUPSにつなげてないんだよ。

しょうがない。あいつを叩き起こすか。

あいつというのは今日のもう一人の当番、増^{ますぶち}渕だ。たぶん上のラボで、ドローンでもいいってるか寝てるかしてるんだろう。マイペースな奴だが、周囲からは一目置かれている。今だって別に無断でサボってるわけじゃない。今日はやることも少ないし、建物内にさえいてくれればオンコール対応でいいさ、あとは任せとけ、と彼に言ったのは僕のほうだ。調子に乗ってあんなこと言うんじゃないかった。

ラボから降りてこないところを見ると、停電に気づかないままソファで寝てるに違いない。電話もチャットもW i z も使えないなら、直接行くしかない。

コントロールルームの自動ドアは、手動で開けることができた。通路に出る。空調が停止しているせいか、いやに蒸し暑い。エレベーターも止まっているようだ。

仕方なく、非常灯に照らされた階段をひたすら上がっていく。ああ、最悪だな、もう。まったく、宇治川花火大会の日ってのは、いつもろくなことが起こらない。

階段を上がりきって、地下二階のがらんとしたフロアに出る。

一角にあるガラス張りの共用ラボの扉を手でこじ開け、足を踏み入れる。毎日ガラス越しに見学者の好奇の視線に晒されて、内々で“動物園”なんて呼ばれている部屋だ。研究

者というけつたいな生き物の動態展示は、あれはあれで結構な人気があるらしい。うちの群れのリーダーはそれをよく心得ていて、常にファンサを欠かさない。おかげで僕らは心労が絶えない。

いつだったか、見学ツアーの気の毒な男子高校生がそれを見せられて、幻滅と軽蔑を足して二で割ったような顔をしていたのが忘れられない。彼の将来の進路を狭めていないことを祈るしかない。

幸い、というべきか、土曜の夜の動物園には当然ながら見学者はいない。

そして、群れの若きホープ、増渕の姿も見えない。ソファには誰も寝ていなかった。ぐりと見渡してみても、赤い非常灯に照らされた部屋はもぬけの殻だ。自家発に繋がった数台の端末だけが白い光を発している。

「おい」

スマホのライトを点けて、大きく振ってみる。

「増渕ー？　いないのか？」

僕の声がうつろに響く。

机の上には、分解中のドローンと電子部品が転がっている。ハンダごてがコンセントに刺しっぱなしだ。オートパワーオフなんてついてない旧式のタイプだから、きつと先端は

熱せられたままだろう。そういえば、ハンダの焼けた匂いがかすかに鼻をつく。直前まで作業をしていたのかもしれない。

嗅覚が封印していた記憶を呼び覚ます。ハンダ付けを覚えたのもバンドだった。あの頃の僕は、刺しっぱなしにして彼女に怒られる側だった。

——ブルースト効果を恨みながら、大きく溜め息をつく。

「まったく、席を外すなら抜けよな。……おい」

コンセントからプラグを抜いてから再度、室内を念入りに見回してみる。トイレだろうか。スマホは相変わらず圏外だ。この状況でオンコールはもはや何の意味もない。

もしや、どこかの部屋に閉じ込められているのか。案外、自動ドアが手で開けられるのを知らないのかもしれないな。

どちらにしても、と僕は考える。何しろ土曜の深夜だ。他部署や府庁エリアまで含めても、この建物に僕と増淵以外の職員がいる可能性はかなり低い。だが一階にある警備員の詰所なら、確実に人があるはずだ。協力を仰いだほうがよいかもしれない。部屋の物理鍵も持っているだろうし、こういう時の対処法も把握していそうだ。

よし、ついでに外の状況も確認してこよう。最悪でも、隣の京都府警の建物には誰かしらいるだろう。

“動物園”を出て、見学者コースに沿う形で一階に向かう。

アルタラの見学スペースを足早に通り返けつつ、巨大な球体を横目で一瞥する。見たところは何の異状もない。内部も正しく機能していることは、ついさっきモニタで確認したばかりだ。アルタラは、何も変わらず涼しい顔で、そこに在り続けている。

だけど。

照明がいつもと違うせいだろうか。その白い巨大な球体は何だかやたらと禍々しく見えて、僕は思わず目を逸らして先を急いだ。

(二)

見学者スペースの大階段を一階までようやくと昇り切ると、顔から汗が滴り落ち、眼鏡が曇った。空調が切れて淀んだ空気が蒸し暑さに拍車を掛けている。

一階から上は京都府庁の管轄なので、あまり馴染みがない。ええと、警備員室はたしか、給湯室の隣だったかな。レトロな回廊をぐるりと回ってそちらに向かう。

ドアは開いている。だが、嫌な予感がする。人の気配がしない。部屋を覗き込んで、声を掛ける。

「あのう、すいませーん」

やっぱり、誰もいない。監視カメラの映像がずらりと並んだディスプレイが、静かに光っているだけだ。

参ったな、こりゃ。こういう時にスマホが使えないのは地味につらい。巡回警備にでも行っているのかもしれない。だとしたらここで帰りを待つべきか？ あるいは、正門脇の保安室に――

視界の端で、何かが動いた。

反射的にそちらに顔を向ける。

アーチ型の白い柱が、暗い空間を額縁のように切り抜いている。奥から吹いてくる不快な湿度を孕^{はら}んだ風に、その先がもう建物の外であることに気づく。中庭への降り口だ。アーチの先には、中央に植えられた枝垂^{しだ}れ桜のシルエツトが、夜の闇の中にくろぐろとそびえ立っている。春には観^{かん}桜祭^{おう}の主役を張る、京都府庁旧本館のシンボルツリーだ。

その幹の横に、人が佇^{たたず}んでいるのが見えた。

ここから十メートルは離れているだろうか。濃紺の上下制服に身を包んだ人影が、こちらに背中を向けていた。猫背気味だが、かなり身長が高い。

——警備員だ！

見るなりそう直感した。

こんなところにいたのか。ああ。良かった。

その姿は本当に頼もしく感じられた。白手袋に黒い安全靴、建物からの光を受けてくつきりと浮かび上がる背中、反射ベストは、セキュリティを司る者のたしかな象徴だった。

ようやく生きた人間に会えて、僕は心から安堵した。馬鹿馬鹿しい想像だとはわかってはいるけど、何だかこの世界から僕以外の人間がすべて消え去ってしまったような気すらしていたからだ。それくらい、館内には人の気配が感じられなかった。まあ、土曜の深夜なんてそんなもんか。

これで何とかなるだろう。まずは停電や通信障害の状況を訊いてから、一緒に増測を探してもらおう。インシデントレポートは増測の奴に書いてもらうか。そうだ、この停電でトイレが使えるのか訊かなければ。安心したら急に尿意を催してきた。もしも使えなかったら悲惨きわまりない。

中庭への降り口に足を踏み出す。雨は小降りになっているようだ。

「……あとう！」

警備員の背中に向けて、声を張り上げたその時だった。

突如、枝垂れ桜から、季節外れの桜吹雪が昏い夜空へと舞い上がった。

ように見えた。

目をしばたいたってから、もう一度大きく見開く。眼前の光景を理解しようとする。

桜吹雪はカラフルにきらめきながら嵐のように舞い踊り、あつという間に僕の視界を音もなく覆い尽くす。

……いや、違う。これは。

桜吹雪、じゃない。

よく見ると警備員が、手袋を木の幹に押し付けている。手袋に触れられた部分が、たちまち格子のような色とりどりの小さなブロックに変化する。ブロックはそのまま光りながら空中に拡散し、夜の闇に溶けていく。消える。消滅する。沸騰する泡のように、桜の木が分解されて“無”に還っていく。桜吹雪のように見えたのは、この世界の物質がその実

体を失う瞬間の、最後の輝きなのだった。

その男は、警備員ではなかった。

異様に長く垂れ下がった腕。あるべき所がない首。人ならざる動き。

「ひ」

僕は声にならない声を上げる。全身が総毛立つのを感じる。なんだ。なんだこいつは。人間じゃない。いや、この世の存在じゃない。見てはいけないものを見てしまったと直感でわかる。何を。何をやっているんだ。こいつは一体何を。

枝垂れ桜を構成していた最後の一片が極彩色にひとときわ明るく輝いて、それからはらりと虚空に消えた。

桜の木の最期を見届けた猫背が。ゆつくりと。

本当にゆつくりと、こちらを振り向く。

今すぐここから逃げ出したいのに。

僕はそこから目が離せない。

取り憑かれたかのように、僕はそれを凝視する。

そこには。

肩より低い異様な位置に配置された、白い狐の面があり。

その中央には。

巨大な卵黄のような、黄色く丸い第三の眼がこちらをぎょろりと睨み付けていた。

その無機質な瞳の奥には、何の意思もなかった。ただのプロセスだけがあった。

そして、そいつの胸部から数センチ前の空間に、うつすらと薄緑色の文字列が浮かび上がっているのを、僕は見逃さなかった。

ALLTAL E S Y S T E M

散々見飽きたロゴ。僕の仕事道具。

ようやく、僕はすべてを悟った。

狐の面の男の正体を。

この世界の在り方を。

そして。

僕とこの世界の運命を。

次の瞬間、本能的に、僕は脱兎のごとく逃げ出していた。

* * *

京都府庁旧本館一階の長い回廊を、全力で走りながら考える。考える。必死で考える。

この世界は。僕が今生きているこの世界は。恐らくアルタラ内の記録世界だ。僕はアルタラに記録された、ただのデータだ。

そんな馬鹿な、と思う。そんな荒唐無稽な話があるものか。だけでもう一人の自分が、それに反論する。アルタラを日々扱い、その振る舞いを熟知しているからこそ、この仮説を支持する情況証拠はいくらでも思いついてしまう。

あの狐の面の男は、アルタラのシステムファイルだ。恐らく、自動修復システムの類だろう。内部ではまさかあんな見た目になるとは想像すらしてなかったが、まあ、そういう

もののなのだろう。

回廊の角を勢いよく曲がり、旧議場の脇のスペースに駆け込む。

小さな扉の隙間からそっと外界を窺う。カラフルなブロックがまたもや虚空に散っているのがちらりと見えて、慌てて扉を閉めた。別の狐面の男が数体、かなり遠くをうろついているのも視認できた。狐面の男は複数いたのか、と戦慄するが、そもそも自動修復システムのプロセスはフォークでどんどん増える設計なのを思い出して、頭を抱えなくなった。ここから外に逃げるのは危険だ。方針を変更して、地下二階のラボにひとまず撤退しよう。と決意する。

所詮、奴らから逃げられないことはわかっている。だけど、少しでも時間を稼ぎたい。頭を冷やして考えたい。

階段を一段飛ばしで駆け降りつつ、さらに頭を回転させる。

この世界がデータであることについては、僕は別にそれほど驚いていない。アルタラが現実の完全な複写であるなら、僕らは両者を区別できない。データだろうと実体だろうと、本質的には何も変わらないし、何も困らない。

問題は、不可視のはずの狐面の男達が、僕から丸見えなことだ。あれはセーフモード特有の挙動だった気がする。普通の状態じゃない。ユーザ空間から隠蔽されているはずのシステムファイルが見えていることで、図らずもここが記録世界であることを示す識別子^{トリーテム}となってしまう。

しかも、奴らは中庭の枝垂れ桜を消した。

誤りを訂正したんじゃない。あるべきものを、消去した。

あったものを、ないように。

自動修復システムがそんなイレギュラーな動作をするケースを、僕はただ一つしか知らない。

——この世界は、リカバリ、されようとしている。

なぜそう断言できるかって？

だって、そのへんをコーディングしたのは僕だからだ。

要件定義は完全に千古先生や徐先輩の成果だけど、ソースコードレベルの実装は僕の

頭に焼き付いている。

* * *

やつのことでガラス張りのラボの前まで戻ってくる。躊躇なく中に飛び込む。ドアを閉め、ロックを掛け、その前に机でバリケードを作る。意味はない。ただの気休めだ。ゾンビ映画のショッピングモールで誰もがやるやつだ。

白く輝くディスプレイの群れに、少しほっとする。ここは僕のホームだ。建物全体を満たしているあの赤い非常灯の光は、どこか精神衛生上良くない気がする。

まだ心臓がバクバクしている。汗だくの額を二の腕で拭う。全力疾走したせいもあるが、室内自体もかなり蒸し暑い。

ふらふらとソファに向かうと、部屋の隅の実験用フリーザーが目に入った。少しでも涼を求めたい本能と、世界がリカバリされることへの諦観から、僕はためらうことなく現代の氷室ひむろの扉を開けた。

電源は切れていたが中はまだひんやりとしている。流れ出す冷氣にしばらく顔を晒すと、少し生き返った気分になった。高価な試薬や中身不明のアンブルをかきわけてみると、深

い地層からなんと、霜だらけの棒アイスが数本発掘された。徐先輩の目を奇跡的にやり過
ごして、数年は熟成されたものと思われる。誰だ、アイスなんか入れたの。だが今となっ
ては天の配剤だ。

そういえば今年は水無月^{みなづき}を食べ損ねたな、と思う。この季節の京都にしかない、氷室の
氷を模した和菓子だ。六月三〇日に彼女が食べ比べと称して何種類も買い込んでくるまで、
関東人の僕は見たことすらなかった。今年はこのアイスを夏越^{なごし}の祓^{はらえ}の代用とするか。彼女
は許してくれないかもしれないけど。

スチールの書棚からアルタラの設計仕様書を取り出し、くたびれたソファにどっかりと
腰を下ろす。解^とけかけのアイス（バナラ）をかじりながら、ディスプレイを光源にして仕
様書をばらばらとめくっていく。ただし、ガラス窓の向こうへの警戒は怠らない。

「ああ、くそ」

本日何度目かの悪態をつく。

うんと乱暴に言えばリカバリーとは、アルタラから記録を取り出してハードを“ゆら
ぎ”の状態に戻し、データを修復して再びアルタラへと戻す一連の作業の総称だ。

もっとも僕らは、千古先生も含めて、実際にリカバリーを本番環境で体験したことはな

い。いわば最終手段、万事休すとなった際の最後の命綱だし、復旧には年単位の時間がかかるから、そうそう簡単に実行されても困るのだ。

その第一フェーズは、領域ごとの記録連結を剥離^{はくり}して解放することから始まる。

目の前の机の上に、分解されたドローンが転がっている。増測の作業の痕跡だ。

恐らく増測は――逃げたのでも閉じ込められているのでもない。システムとの連結を解除されているのだろう。

「……最悪だな」

思わず独りごちる。記録の連結が絶たれると、相互干渉ができなくなる。他人から不可知の状態になるのだ。

その仕様の物理的な意味を、僕は今の今まで考えたことすらなかった。

もしかすると増測はこの建物の中を孤独にうろうろしているのかもしれない。だけど僕には感知しようがない。増測だけじゃない。恐らく僕自身も、本来の警備員も、そして京都市民達もきつと、互いに見えない状態になっているんじゃないだろうか。

停電と通信障害に加え、周囲の人間が忽然と消えて、世界に一人ぼっちで置き去りにされる……控えめに言っても地獄だが、今はこれ以上、考えないようにしよう。僕にはどう

しようもない。

二本目のアイス（チョコ）の包装に手をかける。記録の剥離の次は、何が起こるんだっけ。

「記録連結を剥離したら、ふるい^{sifter}で均^{なら}す。最後は全領域解放だ」

かつてリカバリー手順の読み合わせで聞いた、千古先生の声が脳裏に再生される。

連結が解除された記録を“ふるい”と呼ばれるアルゴリズムで均して、正規化された量子記録ビットの形に還元し、外部に取り出せる状態にするのがこの第二フェーズになる。
ロールバック
後戻りできない処理だから、確かシステム上は、最終確認のダイアログを出す設計だったように思う。

狐面の男が枝垂れ桜の木をカラフルなブロックに還元していたのは、データを均す操作に相当するのだろう。

一向に復旧しない停電も通信障害も、送電網や基地局がやられてしまったせいかもしれない、と考えて背筋が凍る。誰だって真っ暗闇でわけもわからず死にたくはない。この自家発電のありがたさがあらためて身に沁みる。

三本目のアイス（宇治抹茶）は、もうかなり解けていて棒がぐらぐらしている。小豆入りだ。水無月に一番近いかもしれないな、としようもないことを考えつつ、大口でかぶりつきながらページを繰り続ける。

データを均したあとは、記録を外部に取り出す作業になる。この世界でそれがどのように見えるのか、僕には想像もつかない。

ただし、確実に言えることがひとつある。

量子データであるアルタラの記録を取り出すには精密な観測が必要になる。だが観測の精度を上げるほど、元のデータに影響を与えてしまう。元のデータは必ず変質し、失われる。

つまり、リカバリーの過程で、この世界のあらゆるデータは消えるのだ。

京都の街が消え、自然が消え、人々が消える。もちろん僕も消える。

僕は、死ぬのだ。

まあ、しょうがない、と思う。

この部屋に狐面の男達が踏み込んでくるのも時間の問題だろうが、悪あがきしたところ

で、ただのデータでしかない僕には抗いようがない。電気が来ている部屋でアイスを食べながら死ぬるなら、相当幸せな部類だろう。そう悪い人生でもなかったのかもしれない。

せめて、最期が苦しくないことを祈るしかない。殺るならひと思いに殺ってくれ。はて、そのところ、どうコーディングしたつけ？ ……ダメだ。コードの中身は思い出せても、物理的にどうなるのか、仕様からはまるでわからない。

僕の家族や親戚も、そして彼女も、京都にいないくて本当に良かったと思う。アルタラの記録範囲は京都一円の事象だけだからだ。京都に滞在している間だけ、彼らは記録される。そういうものだ。

今この瞬間、記録のどこにも彼らは存在しないはずだ。だけど、だからこそ、こんな地獄絵図を見ずに済む。せめてもの救いだ。

いや。待てよ。

問題は、その先だ。

僕は死ぬ。世界は消える。

そして。

再構築される。

リカバリされた二周目のアルタラに、再びデータが戻される。クロニクル京都事業が開始された二〇二〇年以降の記録が、もう一度アクティベートされる。

その世界で僕は、人生を繰り返す。

僕は、再び——同じ過ちを犯すのだ。

二周目の世界で、宇治川の花火をバックに、彼女はあの台詞を口にするのだろう。

それを聞いた二周目の僕はきつと——いや、一〇〇パーセント確実に、同じ轍を踏む。

くだらないプライドと不可逆変化に対する躊躇に苛まれて、またもや僕は何もしない。あの曲を渡せないまま、きつと彼女から手を離してしまう。

記録が、そうなっているからだ。

たとえ人生を何周しようと、ただの記録である僕らはその呪縛から逃れることはできない。世界がリカバリされるたびに、あらゆる事物は記録を忠実になぞろうとする。この世は決定論的で、すべての事象の運命は遠い未来まで、すでに決まっている。

現実世界でしくじったクソみたいな自分を僕は恨む。あの黒歴史はそっくりそのまま繰り返される。そのたびに僕は深い後悔と自己嫌悪に襲われ、周囲の人間を逆恨みし、自分の性格と境遇を呪い、親の育て方や出身校にまで根拠のないヘイトを向ける。そんな目を背けたくなるような愚行すら、寸分の狂いもなく再現される。

宇治川花火大会だけじゃない。

この七年間のすべての失敗、すべての後悔が永遠にループする。

消し去りたいあらゆる間違いが、リカバリーのたびに何度でも復活する。そして毎回、暗闇と孤独の中で、僕はすべてを呪いながらじわじわと苦しんで死ぬのだ。

なんという無間地獄だろう。

悔しい。

いくらなんでも、悔しすぎる。

自分が消えることが、じゃない。あの過ちが永遠に再生されることが、悔しいんだ。むしろ、きれいさっぱり消し去ってくれたほうが、どんなに良かったか。

「くそっ」

アイスの棒に手につけ、力を込める。棒が音を立てて折れる。

誰だよ、リカバリーをこんな設計にしたの。

——その問いはブーメランとなって僕の脳天に突き刺さる。
僕だ。

いや、正確に言えば基本概念や基盤技術は千古先生や徐先輩によるものだ。だけど、カーネル部分の実装は僕だ。

自業自得。因果応報。身から出た錆。自分の蒔いた種。お前が始めた物語。

……あれ？

膝の上に広げた仕様書に目を落とす。

僕が設計したロジック。僕が書いたコード。

その意味するところを僕は反芻する。

点と線が繋がる。

脳内に電撃が走る。

自問する。じっくり考えている時間はない。勢いよく立ち上がる。ソファのスプリングが悲鳴を上げる。

なにか、書くもの。それと、紙。

ペン立てから油性ペンをむんずと掴む。素早く見回すと、壁に貼られた研究成果のA0ポスターが視界をかすめる。壁から引っ剥がす。四隅のマグネットが弾け飛ぶ。裏側の白い面を上にして床の上に広げ、模造紙代わりにする。

巨大な即席ワークスペースのできあがりだ。

広げた紙の前に膝を突く。

まるで画仙紙に揮毫^{きこう}する書家みたいに、握り締めた油性ペンを大きく振りかざして。

まっさらな平面に、ひとり僕は対峙する。

(三)

丸めたポスターを抱えて、正門から釜座通^{かまんざどおり}に飛び出す。

雨は激しさを増している。広い街路には誰もいない。幸い、狐面の男達も見当たらない。ただ異様な空気だけが渦巻いている。どこか遠くから、くぐもったサイレンのような音が風に乗って聞こえてくる。

街灯も信号機も消えている。真夜中なのに周囲が灰明るい。見上げると、空一面を禍々しい赤いオーロラが覆い尽くしている。その一角、天頂付近に、ぽっかりと真つ黒な穴が空いている。街のあちこちから無数の瓦礫が浮かび上がり、色とりどりのブロックに還元されながら穴に吸い込まれていくのが見える。

想像以上の惨状に、思わず足がすくむ。

あの穴が何なのか、僕にはわかってしまう。

あれは、読み出しプロセスだ。

量子記録データをアルタラの外に取り出すための穴だ。

で、あるならば。

僕は穴をしっかと見据えながら、小脇に抱えていたポスターを広げ、その裏側に書き殴った文字列を天にかざす。

両腕を空に向かって突き出し、穴に紙を見せ付けるようにしながら、あらん限りの声で叫ぶ。

「これを読め！」

あの穴が、アルタラの記録を読み出して外部に取り出しているのなら。

僕はそのプロセスに。

インジェクション攻撃を仕掛けることができる。

センター外部に対しては、ブルーラ製の堅牢なセキュリティを誇るアルタラシステムも、内部には特段の対策はなされていない。

まして、データ内からの攻撃なんて、完全に想像の斜め上のはずだ。少なくとも、僕にとってはそうだった。

普段ならそんな出来の悪い冗談みたいなことは絶対に起こらない。

だけど、リカバリーの時だけは。

自動修復システムが監視を停止し。

記録に沿わない事象が存在可能になり。

クローズドだった世界に、セキュリティホール穴が空いて外部と繋がり。

さらに、全てに気づいた設計者が内部に居合わせたとしたら。

——ちよつと考えれば、そこに内在する脆弱性なんていくらでも思いつける。

特定のコードを仕込んだ入力を注インジェクション入すれば、読み出しプロセスはバリデーションも

せずにそれを愚直に実行してしまう。敵対的プロンプトと組み合わせて後段のセキュリティを騙してやれば、原理的にはシステム権限昇格やデータベースの改竄かいざんだってできてし

まう。

これは、単なるアルタラ上の記録の改竄とはわけが違う。

アルタラ稼働時には、全事象の記録はメモリ上に展開されている。仮にそれを改竄しようとしても、自動修復システム——狐面の男達によるメモリスクラブと量子誤り検出・訂正符号がただちに修復してしまうはずだ。

だがインジェクション攻撃が書き換えるのは、メモリ上で稼働中の記録じゃない。リカバリーの際に外部にダンプされて保存される、データベースの源泉そのものだ。この世界の“外”で書き換えられたデータは、リカバリー後にアルタラにそのままロードされて再び動き出す。

世界が、源泉ごと書き換わるのだ。メモリ上の異状だけを監視している自動修復システムは、一切何も気づかない。

「さあ読め！ 読めよ！」

馬鹿みたいに連呼しながら、空に渦巻くオーロラを睨み付ける。

頭上に掲げたポスターを無数の雨粒が叩き付ける。水滴まみれの眼鏡越しの視界はぼやけ、目にも口も容赦なく雨が入り込む。ずぶ濡れの白い上着を翻して、僕は天に向かって

宣言する。

広げた紙に書かれているのは、設計者しか知り得ない量子記録の操作コード。アルタラ
ハードコーディング
に堅　書された一行。ワンライナー

これは、世界の在り方に気づいた人間のささやかな抵抗だ。

現実のクソみたいな自分自身に対する怒りの叛逆だ。

もうすぐ世界も自分も、このまま消えてただのゆらぎに戻るのだろう。だけど僕なら、
そこにわずかな痕跡を刻みつけることができる。

持てるすべてを込めたコードを全力で頭上に突きつけて。

僕はひとつの賭けに出る。

まるで僕の宣言に呼応するかのように、世界がぐらりと傾き始める。いきなりつんのめ
りそうになって、慌てて足を踏ん張る。釜座通が下り坂になる。重力がおかしい。三半規
管が猛烈な違和感を訴えて酔いそうになる。

地面の傾斜は次第にきつくなっていく。前方に滑り落ちそうになって、横っ飛びして
ガードレールにしがみつく。肘に鋭い痛みが走るが、気にしている余裕はない。

京都の街が、折り畳まれようとしている。

世界が歪んでいく。ケヤキ並木の張り出した枝の合間、空があるはずの空間に、なぜか中京区あたりの碁盤の目がどこまでも広がっている。御池通沿いのビル群がせり上がり、その向こうに東本願寺や西本願寺の大伽藍、京都タワーや京都駅ビル、整然と連なる家並みの葎が覆い被さっていく。こんなシーンを昔、何かの映画で観たような気がする。

空間がさらに曲率を増し、僕はガードレールにぶら下がる格好になる。振り落とされないように街路樹の蔭に腕を絡ませ、植え込みに片足を突っ込んで固定する。バキバキと小枝の折れる音がして、草と土の匂いが充満する。体のすぐ横を、病院前に停まっていた車が空に吸い込まれていく。

いつの間にかポスターの紙もどこかに飛んでしまったのに気づく。でも、いずれ何もかもが穴に落ちる際に必ず読み出しプロセスを通るから、まあ問題ないだろう。さつき空に紙をかざしたのも、所詮、ただのパフォーマンスだ。ぶっちゃけ窮鼠の意地、外の世界に一矢報いてやりたかった、それだけだ。

京都のあらゆるものが浮かび上がり、分解されながら空の穴に吸い込まれていくのが見

える。きよみず清水の舞台。かもがわ鴨川デルタ。あらしやま嵐山の竹林。きたもん北門前の進々堂。けんげ蹴上インクライン。
うめこうじ梅小路の市電カフェ。しじょうかわらまち四条河原町のマルイ。きたの北野の天神さん。でまちやなぎ出町柳の映画館。

どれも思い出の地だ。バンドの中で京都府外出身は彼女と僕だけで、他のメンバーは見向きもしないからという理由で、ベタな観光名所巡りによく引つ張り出されたものだった。そのシンボル達が次々と分解されて消えていく。彼女と最初に訪れた東寺の五重塔も、さかさまになりながら量子記録ビットに還元されていく。

不安定な格好で真っ赤な空を見おろしながら、最期まで僕は自分勝手な奴だったな、とあらためて考える。

僕なら世界を書き換えられる。そう気づいて、油性ペンを振りかざした僕の脳裏に反射的に浮かんだのは。

あの晩、雑踏に消えていく彼女の後ろ姿だった。

世界平和でもなければ、人々の幸せでもなく。

僕はただ、ちゃんと彼女に。

あの譜面を渡したいと思った。

どこまでも自己中でどこまでもわがままな僕は、いまわの際きわにこんな卑近なことしか思いつけない。

やり直したいことならもつと他にいくらでもあつただろうに。

なのに、なんで、こんな。

取るに足らないことを。

まるで脈なしの相手にただ自作の譜面を渡すだけなんていう。

自己満足の塊でしかないことを。

まあ、世界平和なんてコーディングしようがないのはたしかだし、短時間で書けるコードには限界がある。

人間精神は情報密度の極致であって、人、の、心、を、書、き、換、え、る、こ、と、は、不、可、能、だ、だから僕や彼女の心を直接改竄するなんてのは、思い上がりも甚だしい。

単純な物理状態の書き換えコードすら、この紙のサイズにはきつと書ききれない。アルタラ内の量子記録の内部表現を僕らは間接的にしか知り得ないからだ。

咄^{とつ}嗟^きに書ける低水準のネイティブコードを書くしかなかった。

それがデータの世界に対して、具体的にどう作用するのかわからない。グリッチ的な都合良い改変を作れるわけではない。空気が水に、光が音になっても文句は言えまい。せいぜい局所的なレンダリングが少し変化するとか、レイトレーシングがちよつとバグるとか、そのくらいだろう。

だから。

正直、これで何かが変わるとは思っていない。仮に理想的な条件が揃ったとしても、何かの“きっかけ”程度にしかないだろう。リカバリー後の世界の自分に期待は禁物だ。やっぱり譜面は渡せませんでした、がオチだろう。

だけど、気づいてしまった以上、ダメ元でもやらずにいられたかった。

ただの詰んだエンジニアの自暴自棄じゃん。

くそ、とことん馬鹿だな。笑えてくる。

十メートルほど離れている病院の建物がいよいよ、狐面の男達の群れに解体され始めた。京都府庁の建物にも狐面の男がびっしりと取り付き、すでにかなりの部分が消え去ってい

る。見渡す限り、末法の世もかくやという光景が広がっている。

だいたい、リカバリーするほどの障害を引き起こすって、一体何をやらかしたんだよ。
現実世界のどのどいつなんだよ。

さすがに自分ではないと信じたいが、優秀な同僚達がこんなヘマをやらかすとも思えないし、人為ミスでデータが破損するほど可用性が低いシステムでもない。よほど変な実験でもしたんだろうか……しかも、本番環境で。誰にせよそんな馬鹿が未来のセンターにいるのかと思うと、他人事ひとごとながら心配になってくる。

いや、自分の書いたリカバリープロセスもひどいだろう、とセルフツツコミが発動する。あまりに乱暴すぎた、と壊れゆく世界を目の当たりにしながら思う。もつと上品グレースフルにやるべきだった。要改善点を軽く百個は思いついたので、主要なやつをさっきの紙の隅にクレマー気味に書き殴ってやった。これもどこまで読み込まれるかはかなり怪しいけど。

いずれにせよ、もし“次”があるなら。

もうちょつと穏やかにやってほしいものだ。

空いた手でなんとか、ポケットからスマホを取り出してみる。気に入っていたターコイズブルーのカバーが知らぬ間に割れ、電池残量も一〇%を切っている。もうすぐただの文

鎮と化するだろうが、世界が終わるほうが早そうだ。

片手でフォトライブラリを開く。三年前まで遡る。浮かれて撮った写真達がスクロールされていく。

一枚を開く。

圏外だからもう、低解像度でしか表示されない。リハの合間にこっそり撮った、ギターボーカルの横顔。演奏中、斜め後ろの定位位置からいつも見ていたその構図が、僕にとっての彼女の原風景だった。

粗い画像がさらにぼやける。視界全体が滲み、鼻の奥が痛む。

せめて眼鏡の水滴を拭きたいが、この体勢ではどうしようもない。

悔いのない人生なんて絵空事だ。結局最後まで、未練がましく後悔しながら死んでいく。僕はそういうタイプの人間だ。

とうとう狐面の男に気づかれたようだ。腕と脚もそろそろ限界だ。もう、どうとでもなれ、と思う。

手に込めていた力を緩める。

指先がガードレールから離れ、システムの当たり判定の対象外となる。

意外にも落下の不快感はなかった。ゆっくりと僕の体は、空の高みの穴へ向かって落ちていった。



「バンド、辞めることにしたんだ」

ごめんね、と言う彼女の小さな声に重なるように、ひゅう、と甲高い音が鋭く上空を切り裂いた。彼女の背後の夜空を、ひととき長い光の尾がどこまでも昇っていく。束の間の静寂に続いて本日最大の尺玉が、鮮やかな大輪の花を天高く咲かせた。彼女の髪留めと白い首筋が照らし出された。わずかに遅れて重低音が大気を震わせ、僕の腹に鈍い衝撃を伝えた。

彼女が何を言っているのか理解できなかった。やつとのこととで絞り出した「そっか……」というひどすぎる返しは、スターマインの爆音にたちまちかき消された。源氏物語をイメージした雅な色彩が絶え間なく空を焦がし、無数の破裂音が山々に反響する。僕はただ茫然と、立ちすくむほかなかった。

二〇二四年七月六日、土曜日。

第四回宇治川花火大会は、今まさにクライマックスを迎えようとしていた。

突如、彼女の背後から、季節外れの桜吹雪が昏い夜空へと舞い上がった。

ように見えた。

目をしばたいたしてから、もう一度大きく見開く。眼前の光景を理解しようとする。

桜吹雪はカラフルにきらめきながら嵐のように舞い踊り、あっという間に僕の視界を音もなく覆い尽くす。

……いや、違う。これは。

桜吹雪、じゃない。

よく見ると周囲の山が、橋が、川が、建物が——たちまち格子のような色とりどりの小さなブロックに変化する。ブロックはそのまま光りながら空中に拡散し、夜の闇に溶けていく。消える。消滅する。沸騰する泡のように、周囲のあらゆる物体が分解されて、無に還っていく。桜吹雪のように見えたのは、この世界の物質がその実体を失う瞬間の、最後の輝きなのだった。

あれだけ道にひしめいていた群衆が、いつの間にかいなくなっている。彼女と僕だけが、

転回する世界に立ち尽くしている。

彼女のターコイズブルーの浴衣の裾にノイズが走り、表面にカラフルな四角が浮かび上がりが始まる。次の瞬間、彼女の中着に付けられた桜のストラップが白く発光し、まるで偽の桜吹雪に対抗するかのように水^{ワイヤフレーム}引の花びらを撒き散らし始める。ほんの一瞬、世界の解体が気休め程度に減速するが、すぐにぶり返して、一層激しくブロックを噴出させる。

何が起こっているのか、まったく理解できない。

桜と花火とカラフルなブロックは渾然一体となりながら、RGBの花嵐となつて僕らの周囲を激しく渦巻く。異様な赤いオーロラに照らされ、ダウンサンプリングされつつある彼女は、まったく異変に気づいていないように見える。何かを問いかけるような視線で、フリーズした僕を見つめている。

もしかしたら、ブロックも桜吹雪もオーロラも。

僕一人だけに見えている幻覚なのかもしれない。

脳天が割れるように痛い。いよいよ僕の頭もおかしくなったのだろう。

長い沈黙の果てに、彼女が伏し目がちに視線を逸らした。タイムアウト、という言葉がふと浮かんだ。

世界の終わりってきつとこんな風なんだろうな、と幻覚の中で思った。

彼女がバンドを辞める。

それは確かに僕にとって、一種の世界の終わりと同義だった。

世界が終わって僕が消える前に。

どうしてもやらなければいけないことがある気がした。

やってもきつと後悔するし、やらなくてもきつと後悔する。僕はそういうタイプの人間だ。

でも、それならば。

どっちに進んでもどうせ後悔するんだとしたら。

やって後悔したほうがいい。

どこかで見たような気もする、荒れ狂うカラフルな光の渦が、生まれて初めて僕をそんな気分させた。

だって。

人生は、一度きりなのだから。

人生は、やり直し^{リカバリ}ができないのだから。

百歩譲ってやり直せると仮定したところで、やり直した僕はもはや今の僕ではないわけ
で、その人生を僕が知るすべはない。僕にはこの人生しかない。

人生は、どこまでも一意^{ユニーク}で非代替^{ノンファンジブル}なものだから。

リュックから五線譜の束を取り出した。

「……あの、これ」

唐突に、何の脈絡もない話を切り出す。

「まだ途中なんだけど、ずっとオリジナル、やりたくて」

声が震える。脳天がぐらぐらして、視界がぶれる。

やっぱり、めちゃくちゃ恥ずかしい。嫌われるかもしれない。僕は馬鹿だ。でも。

ここまで来たらもうやけくそだ。

「……ごめん。勝手に当て書きした」

彼女の目が大きく見開かれる。ラベンダーがふわりと香る。

「こんなの渡されても困ると思うけど」

花嵐が激しさを増してゆく。怒濤のブロックと桜の花が荒れ狂う猛吹雪となって僕らを

包み込む。

無数の尺玉が彼女の背後で次々と炸裂する。菊や牡丹や柳が所構わず咲き乱れる。赤いオーロラが空一面を躍動する。

「餞別にできそうなもの、これくらいしかないから」

光と音と振動が世界を灼き尽くす。五感が飽和^{サチ}する。震える手で譜面の束を突き出して、僕は彼女に向かって宣言する。

「――読んで、ほしいんだ。君に」

なんか、前にもあったな。こういうの。

感謝と、敬意と、少しの恋慕と、ただ幸せを願う気持ちと。

あるいは、いつかどこかで、あり得たかもしれない後悔と逡巡^{photon}と覚悟と。

持てるすべてを込めたコードを全力で彼女の前に突きつけて。

僕はひとつの賭けに出る。

まるで僕の宣言に呼応するかのように、世界がぐらりと傾き始める。

□

意識が明瞭な輪郭を得て、ゆっくりと目を開いた。

すでに窓の外は明るいようだ。枕元のスマホに手を伸ばし、傾けて時計を確認する。

二〇二七年七月四日、日曜日。午前五時四二分。

アラームより早く目が覚めたことに、ベッドの中で少し驚く。こんなにすっきりした目覚めは何年ぶりだろう。いつもは鉛のように重いまぶたも頭も、今朝は別人のように軽やかだ。

まるで自分と世界がたった今、作り出されて動き出したかのような、生まれたてのまっさらな朝だ。世界五分钟前仮説かよ。

冴えた頭とは対照的に、全身の筋肉には心地よい疲れがまだ残っている。昨晩は群衆にもみくちゃにされながら宇治を随分歩いたし、急な雷雨にも見舞われて、なかなかの運動量だった。宇治橋の両端の茶屋で水無月の食べ比べもやった。少しはしゃぎすぎたかもしれない。

れない。だけど、後悔はしていない。

だって、宇治川花火大会なんて。

絶対にないがしろにできない、人生の記念日なのだから。

二〇二四年、三年前の宇治川花火大会。そこで賭けに出た結果、今の僕らがある。

今でも、ありありと思い出せる。

三年前のあの日、花火のクライマックスで、僕は実に不思議な幻覚を見た。花火と桜吹雪とオーロラが渦巻いていた、という話をするとなんて彼女に「何その欲張りセットみたいなの」と大笑いされるし、自分でも欲張りセットすぎると思う。

誰だよ、あんな幻覚をレンダリングしたの。

——何度も繰り返したその問いはブルーメランとなって僕の脳天に突き刺さる。
僕だ。

幻覚というものは僕の脳が生み出しているわけだから、自分の頭が相当イカれていたんだろう。あの日、僕は緊張と水分不足と酷暑で熱中症になり、悪い夢みたいなチープでサイケな幻覚を見た挙げ句、失神して救護ブースの世話になるという醜態を晒した。体が前

に倒れる瞬間、舞い散る五線譜の向こうで、泣きそうな顔で僕の名前を何度も叫んでいた彼女の姿を今でもかすかに覚えている。

あの花火の数日後、彼女は道央^{どうおう}の実家に帰っていった。彼女の脱退はバンドにとっても痛手で、程なくしてバンド自体も解散したけど、オンラインでの緩い繋がりは続いている。僕が倒れたことでオリジナル曲の存在は全メンバーの知るところとなり、無数のダメ出しと怒濤のアレンジの結果、見違えるようなクオリティになった。翌年、全員が再集結しての音合わせで、僕はこっそり泣いた。

その後も年に一度、宇治川花火大会の翌日曜日には集まってセッションすることになっている。ちょっとした同窓会みたいなものだ。そして前の晩には、彼女と花火大会をそぞろ歩くのが恒例になっている。

そんなわけで昨晚のアルタラセンターのシフトは、盆休み返上プラス焼肉と引き換えに後輩に担当してもらった。増淵もついていたはずだし、着信も一切来てないので、無事に終わったんだろう。

久々に熟睡した分、見た夢も結構長かったような覚えがある。雨の中でひたすら叫んで

いたような気がする。何の修行だよ。

先にベッドからそつと抜け出して、寝室のカーテンの隙間から外を覗く。

烏丸御池からすまわいけの九階の窓からは、中層階の建物群の向こうに北山きたやまや比叡ひえいの青い峰々がよく見える。昨晚の雨は上がっているようだ。風が強いのか、低い夏の雲がダイナミックに空を流れていく。雲の隙間から朝の光が差すと、雨上がりの京都の街は一気に彩度を増して、眩しさが寝起きの僕の目を射た。

眼鏡を装着し、世界を高精細モードにする。雷雨に洗われた京都の大気は驚くほど澄んでいて、いつもにも増して新世界が五分前に始まった感がある。

ふと北東を見やると御所ごしよの向こう、鴨川の方角に、大きめの虹が架かっているのが見えた。

あれっ、と思った。

虹というものは必ず、太陽と反対側にできる。夏の早朝のこの時間であれば、本来は西の方向に見えるはずだ。

誰だよ、ライティング、バグってるぞ。

もし本当に世界を五分前に作った奴がいたとしたら「ハロー・ワールド」から出直して来いと言いたいところだけど、じゃあお前はどうかんだよ、この手のポカミスをやったことないのか、ともう一人の自分がセルフツツコミを入れる。

なぜか急に、駆け出しの頃にコーディングしたアルタラのリカバリープロセスが思い出される。やけに冴えた今朝の僕の頭は当時気づいていなかった要改善点を大量に洗い出してきた、脳内に警告マークをいくつもポップアップさせる。僕も少しは成長したということだろうか。

ううむ。ちょっとリカバリーの全過程を総点検したほうがよいかもしれない。何しろ僕らは、千古先生も含めて、実際にリカバリーを本番環境で経験したことはないのだ。もつとも、一度も実行せずに済むのが理想ではあるのだけど。来月には高校生相手のオープンキャンパスもあるし、今月は忙しくなりそうだ。

再び窓の外に目をやると、もう虹は消えていた。いつもの京都の街並みが広がっている。虹色に見える大気光学現象はいろいろあるから、その類のものだったのかもしれないな

そこまで考えて初めて。

ようやく気がついた。

頭の中で、どこか懐かしいようなメロディが流れ続けている。

どうやら、目覚めたときからずっと無意識に脳内リピートしていたみたいだ。こういう転調、こういう変拍子に僕は本当に弱い。いかにも僕が書きそうな、だけどもるで身に覚えのないコード進行。もちろん、あの当て書きの曲とも全然違う。何の曲だっけ。

——ああ、そうだ。夢の中で書いたコードだ。

雨に打たれながら、空に向かって掲げたコード譜だ。

……コード譜？ そうだったっけ？

ふと、そんな疑問が頭をもたげる。コードはコードでも、プログラムコードだろ。なぜか、どこかでそんな声がする。書き殴ったのはアルタラのネイティブコードだったような記憶も、かすかにある。終わる世界で、白い大きな紙に油性ペンを振りかざして——

いや、違うな、と思い直す。どうも記憶が混乱しているようだ。夢とはいえ、雨の中で空にアルタラのコードを掲げて叫ぶってどんな状況だよ。

やっぱり、あれはコード譜だった気がしてきた。三年前、僕はコード譜を彼女に突き出した。その記憶と昨晩の雷雨が混ざったとか、どうせそんなもんだろう。単純な奴だ。

それに僕の脳内で流れ続ける、まだ誰も知らない新しいこのコード自体が、きっと何よりの証拠だ。

本当にこのコードを、僕が書いたのかよ。夢の中で。

……結構、上出来じゃん。

夏の夜のはかない夢の詳細は、もはや思い出せない。

だけど、なんとなく。

あの時の気持ちを忘れてはいけない気がした。夢の中の僕は、どうしようもなく馬鹿で、自己中心的で、けどとても真摯な思いに突き動かされていたような気がした。

僕にしか書けない、世界を書き換えるコード。

僕の嗜好の脆弱性を正確に突いてくる、どストライクなコード。

うん。僕らの次の新曲には、この進行を使おう。素直にそう思った。

五線紙と鉛筆を手に取り、ベッドの端に静かに腰掛ける。

まっさらな譜面を広げると僕は、記憶から消えないうちに鉛筆を走らせ始めた。

(了)